

朝日 俳壇



〈日曜日のプローチ 42〉 junaida

大甲 童選

- 蠟梅を老梅と書き狼狽す (川崎市) 吉川 淳子
- 寒釣の浮子の微動を見逃さず (大阪市) 今井 文雄
- 束の間を木偶となりたる日向ぼし (鎌ヶ谷市) 都丸 浩美
- 風邪ひいて余命を思ふ耳順かな (入間市) 橋爪あゆみ
- 風花や生まれて生きて死ぬ定め (福島市) 安斎真貴子
- 梅一輪咲きて風よぶ鳥を呼ぶ (横浜市) 横山 俊宏
- 探梅や帰路の居酒屋決めてあり (東京都江東区) 小出 功
- 曇間より佐保姫覗く日和かな (青梅市) 小城 敏子
- 晩年を他郷に棲みて冬銀河 (宇治市) 竹林 敦子
- 探梅の道順かへてたどりのつく (倉吉市) 尾崎 慎雄

【評】第1句。同音異義語を三つ重ねユーモラスな句になった。俳諧味あり。第2句。「寒釣」は寒中の魚釣り。「見逃さず」が釣り師の鋭いまなざしを示す。第3句。「木偶となりたる」と言い切ったところが良い。「木偶」は木ぼりの人形。

高山れおな選

- ☆さらさらと春をよろこび我桑多市 (本美市) 清水 宏晏
- ひれ伏して祈る人をり冬の寺 (川崎市) 鳥飼 友子
- 鶯や歌詠む母の帰らざる (福知山市) 森井 敏行
- 受験子の黙受験子の母の黙 (大牟田市) 古賀 紀子
- 癡飼つてやると言ふ師や春を待つ (寝屋川市) 今西 富幸
- 冬晴の光の海に浮かぶ歌 (東京都渋谷区) 田中 胡桃
- 下頭や軽トラなぜか似合ふ奴 (熊本市) 江藤 明美
- 枯木にあそぶ雀を見てあそぶ (合志市) 坂田美代子
- 裸木に名のありタマノホシザクラ (八王子市) 額田 浩文
- 寒いねといふ人もなしパスを待つ (神奈川県開成町) 内野 正

【評】清水さん。緩さが伝える喜び。鳥飼さん。蕪村の〈住吉の雪にぬかづく遊女説〉を連想。掲句はもちろん室内の景だろう。森井さん。あまたの和歌に詠まれた篤の聲に、今は亡き歌詠みの母を思い出す。十席。彼万智の高名歌を踏まえる。

小林 貢子 選

- とりとめも無くてもの食ふ寒さかな (彦根市) 馬場雄一郎
- 森の香の風渡りゆく雪解かな (高山市) 直井 照男
- 探梅や富士の見えぬをまたもいふ (横浜市) 高野ゆり子
- 好きな季節五つの中の春隣 (川崎市) 渡邊 隆
- 頬被したまま眠る祖母である (三重県明和町) 西出 泥舟
- 春風に織りこむ君に会いたいと (高松市) 樋口淳一郎
- ニッポンのささくれ立つや兜太の忌 (横浜市) 大久保透美
- 足生えて蟬に煩惱生まれけり (八王子市) 徳永 松雄
- ☆寒さには耐へ淋しさに慣れず住む (香川県琴平町) 三宅久美子
- ☆さし介護施設へもいざこれぬ (横浜市) 島 光

【評】一句目、日常を何だかとりとめないものと感じ、寒さがこたえる。二句目、雪解風に森の香りとは何ともしすがすがしい。三句目、芭蕉の「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」の境地にはなかなか至れない。四句目、私も「春隣」は五指に入る。

長谷川 權選

- こはれてく我が夫を見つ老の春 (東京都中野区) 日向友紀子
- トーストにバターをぬれば春の色 (東京都杉並区) 青木 公正
- 俳句いま心の波動春を詠む (新居市) 中西 洋
- 煩惱を日向に干して忘れけり (東大阪市) 志賀 克毅
- ことごとく六畳にあり雪ごもり (長野市) 縣 展子
- ☆寒さには耐へ淋しさに慣れず住む (香川県琴平町) 三宅久美子
- 外套のマッチをさがす昭和かな (松山市) 河村 俊作
- 病み晴れて一年なるや妻の春 (山武市) 伊藤 日史
- ☆さらさらと春をよろこび我桑多市 (本美市) 清水 宏晏
- 寒の水飯美しく炊きあがる (三重県明和町) 西出 泥舟

【評】一席。人間が壊れてゆく……。多くの夫婦が経験する現実。二席。柔らかに溶けてゆくバターの色。幸福の色。三席。心の波動をとらえるには言葉をしなやかに。春のように。十句目。寒の水だからこそご飯の美しさ。これも幸福の色。

俳句時評 鮎山實と佐藤鬼房

岸本 尚毅

〈残雪や山女を炙り雀喰み〉は鮎山實の句帖に残された未発表句。雀を食っているのだ。鮎山は今年生誕百年。その全句集が『新装版 鮎山實全句集』(朔出版)として二十余年ぶりに復刊された。

「目に見えて秋風はしる壁量」(雨つぶの雲より落つる燕子花)などの洗練を極めた句で知られる鮎山だが、「終戦直後の社会性俳句時代、六十年安保後の長い試行錯誤時代」(長谷川權)があった。「社会性俳句」とは〈起重機にいた

その作風を変えていった。代表句に〈陰に生る妻尊けれ青山河〉などがあり、東北の風土に根ざした重厚な作風を持つ鬼房は、最晩年も〈泥池と生き煙を耕せり〉(翅を欠き大いなる死を急ぐ蟻)のような、何か重いものを背負ったかのような句を詠み続けた。鬼房についても生誕百年記念の『佐藤鬼房俳句集成』(朔出版 全三巻の刊行が進んでおり、二〇二〇年の全句集(第一巻)に続き、昨年六月に「随想・評論 I」(第二巻)が刊行された。「社会性俳句」に批判的だった鮎山實も、鬼房の句は高く評価していたという。(俳人

第37回日本伝統俳句協会賞 協会賞は兵庫県の藤井啓子さん(年齢非公表)の「祇園祭」(30句)に、新人賞は東京都の菅谷糸さん(48)の「日の匂ひ」(30句)に決まった。赤松勝著「橋間石の百句」 「銀河濃し岩波新書得て帰る」をはじめに読み解く。「掻き氷水にもどりに役者かな」「銀河系のとある酒場のヒヤシンス」(ふらんす堂・1650円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。